

提 言

— 心から身体へ, 身体から心へ —

川井 尚 (日本子ども家庭総合研究所・愛育相談所)

子どもの心の臨床を中心とし、年月を過ごしてきた。筆者は心の臨床の仕事をしてきたわけではあるが、「心」だけに眼を向けてきたわけではなく、常に「身体」をも意識してきた。

人は、その人固有、独自の心と身体をもって、その生涯を生き暮らしている。この極めて当たり前のことを心得としてきたのである。人はすべて「私という心と身体」をもって生き暮らしているのであり、そのような人との出会いのなかで臨床をしてきたといつてよい。心の臨床といういわば「特別な人と時と場」のなかに、心理臨床家としての「私の心と身体」と、クライアントの「私の心と身体」とが出会い、そこに心理臨床というクライアント利益が生じる。

とはいっても心の臨床家である私は、その子、その人の主に「私の心」を、また、精神科医はその人の「私の精神症状」を、一方、小児科医、保健師、看護師などは、その各専門性をもって主にその人の「私の身体」を診ることになる。もし、これら各領域の専門家による共同作業、あるいはチームが組めれば、ひとりのクライアントに、心の臨床家は「心から身体へ」、身体は「身体から心へ」という視点に立つ臨床が成り立ち、「私の心と身体」を丸ごと診、援助、治療というクライアント利益が生まれる。

ところで、ごく当たり前のことではあるが「身体は、身体のことを知らない、自分の身体を知り、体験できるのは私という心」である。子どもから成人に至るまで「私の精神症状、身体疾患、身体障害」、そして現在クローズアップされている「発達障害」もそれを知り体験しているのは、その子、その人の「私の心」であることを忘れてはならない。このことを心得てこそ、その子、その人のための援助がはじめて生まれる。

最後に、ここに述べてきたことは、心の臨床の職人として私がつ、極めて単純で、常識的な見解であり、提言というより小児に関わるあらゆる専門家に、このことをほんの少しでも伝えたいという思いのみで書き綴ったものである。



ゆずりん 2歳8か月

写真提供 三輪和宏・由美子